

弓 滋先生を送る

横山紘一

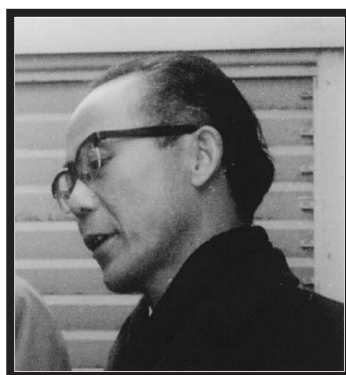
弓 滋先生は長く国際極運動観測事業 (IPMS) の運営にあたられ、地球回転変動の観測・研究に大きな足跡を遺された。弓先生から IPMS の運営を引き継いだ者として、地球回転変動の観測研究の歴史を顧みながら弓先生のご功績を偲びたいと思う。

弓先生に最後にお会いしたのは、1999年に国立天文台水沢観測センターで行われた「緯度観測 100年」の記念式典のときであった。同観測センターの前身である「緯度観測所」は、万国測地学協会の要請に応じ1899年(明治32年)に明治政府によって設立されたので、1999年でちょうど100周年を迎えたのである。水沢の緯度観測所は、アメリカの2カ所、イタリア、中央アジアの観測所とともに「国際緯度観測事業 (ILS)」の観測網を形成し継続的な緯度観測を開始した。やがて観測的概念は、緯度変化から極運動へ、さらに自転速度変動を含む地球回転変動へと拡大されていく。1962年には、国際天文学連合 (IAU) と国際測地学・地球物理学連合 (IUGG) の決議によって ILS は「国際極運動観測事業 (IPMS)」へと拡大改組され、観測網も世界30カ国以上に増加した。IPMSの運営に責任を持つ中央局が水沢に設置されたのはこのときである。緯度観測100年の「思い出集」における弓先生の回顧によれば、『その中央局は服部忠彦博士を長として水沢におき1962年1月6日に発足させることに内定し、云々』とある。IPMS発足からわずか2カ月後、中央局長の服部忠彦氏が急逝した後を受けて弓先生が中央局長に就任された。

緯度観測所は1922年から1934年にかけて ILS の中央局を担当しているが、ILSの5観測所に比べて IPMS傘下の観測局は最終的には50カ国ほどに達した上、結果の公表の迅速性が求められたため、IPMS中央局の運営は非常に厳しいものがあつた。弓先生は、このような国際的要請に応じるため中央局の基盤を整備し、また機能をしだいに強化し、定年退官される1980年まで中央局長として IPMS の観測・研究に主導的役割を果たされた。

このような成果を背景に、1971年 IAU シンポジウム No. 48「地球回転」が、緯度観測所の主催のもとに盛岡で開催された。これは、天文学・測地学分野におけるわが国最初の国際シンポジウムであり、日本の関連分野に与えた影響は非常に大きいものがあつた。収録は、ベルギー王立天文台長のメルキオール教授と弓先生をエディターとして出版された。

その後、弓先生は ILS 全期間の観測記録のデータ



弓 滋先生

略 歴

1916年3月30日生	
1939年	東京大学理学部天文学科卒業 朝鮮総督府気象台技手
1948年	佐賀軍政部技術員
1949年	緯度観測所文部技官
1962年	緯度観測所観測研究部長 国際極運動観測事業中央局長
1980年	緯度観測所を定年退官 東洋大学文学部教授
1987年	勲二等瑞宝章
1975~1977年	日本天文学会理事長
2004年1月13日	逝去(87歳)

ベース化と再計算を提唱、国際的な基金を獲得し作業を指揮して、1980年にその大事業を完成された。これによって、1899年からおよそ90年間にわたる ILS の観測に基づく極運動結果が、最新の天文常数に準拠して求められた。この成果は最も信頼できる ILS データとして今日の意味を持っている。

何度か同行した国際集會の中で、1978年のスペインのサン・フェルナンドにおける IAU シンポジウム No. 82「時と地球回転」は、弓先生にとってことさら感慨深い国際集會であったように思われる。当時は、人工衛星や月をターゲットとしたレーザー測距や超長基線電波干渉法 (VLBI) など、いわゆる宇宙測地技術が NASA によって開発され、実用化前夜という状況にあり、このシンポジウムは、国際観測態勢を、光学位置天文法から宇宙測地技術へと変革していくための国際合意を図る場になった。弓先生は中央局長として、水沢が大きな役割を果たしてきた ILS および光学



IAU シンポジウム No. 78. 日本からの参加者達と。

観測の幕引きを決心されたのであった。その後、組織としての IPMS は、1987 年末まで続いたが、1988 年には宇宙測地技術のみによる「国際地球回転観測事業 (IERS)」が発足して今日に至っている。

弓先生のご活躍の場は、IAU や IUGG という国際組織が中心であったが、それらにおいて主導的な役割を果たし得たがゆえに、わが国の関連研究分野が常に活性化され続けてきたのだと思っている。一方、緯度観測所の研究部長として宇宙測地技術時代の到来をいち早く察知し、その導入を図りながら諸般の事情でその道筋をつけられなかったのは弓先生にとって痛恨事であったと思う。しかし、今やわが国では、これらの技術を発展させながら研究領域の拡大と学問の精密化がなされつつある。これをもって、いささかのご供養となれば幸甚である。

国内学会においては、学術審議会専門委員、測地学審議会臨時委員、天文学・地球物理学・電波科学研究連絡委員会委員を歴任されるとともに、1950 年からは日本天文学会の理事長の重責を果たされた。また、緯度観測所を退官後は、東洋大学文学部の教授として天文学の普及に尽力された。

最近韓国では、弓先生が最初に赴任された朝鮮総督府気象台の科学史的研究がまとめられつつあり、若き日の写真の照会があったと聞いている。この研究の報



IAU シンポジウム No. 48 のレセプション (1971 年)。

告書が完成する前に逝去されたのはまことに残念なことであった。

いささか、私的なことを回顧してみたい。弓先生の現役時代のある時期からご退官までの間、中央局の仕事を仰せつかり、先生の警咳に接しながら数多くのご教示をいただいたのだが、なかでも外国人研究者の知己を得たことが私にとって最も大きな財産となった。国際研究集会に私を同行されることが多くなった頃から、中央局長の後継に私を擬しているのかなという感じを持ち始め、そのことによる相応の緊張もあったものの、多くの知己を得ながらの国際研究集会をたいへん楽しませていただいた。これは、後に IERS の運営委員長としての組織運営に大きな力となったと感謝している。

私の書斎にあるアルマゲストは、弓先生がご退官の折、むりやり強奪したものである。記念には是非頂戴したいとお願いしたところ、かなり渋っておいでであったが、ついに根負けしてくださったものである。国際研究集会でのいく葉かの写真とともに弓先生を偲ぶようですがとして大切にさせていただきます。

長い間のご薫陶に深甚の感謝を申し上げ、弓先生をおくる辞といたします。